道では本会に対し道内十六の自然公園の保護、利用計画について意見を求め、その調査を委托されているが、昭和四十年度は第一次として道東地方の自然公園がとり上げられた。

この実地調査については、当時ご都合のつく方の参加を得て行なわれたが、第一回は十月七日より四日間、網走国定公園を東条会長、井手理事長、石川理事により、道からは斎藤生物保護指導監が同行。第二回は阿寒国立公園を十月二十五日より六日間、井手理事長、楡金、金光理事により、道からは市川林政課長が同行。第三回は十一月十九日より四日間、厚岸、野付風蓮道立自然公園を井手理事長、伊藤、島倉、籠山、渡辺理事により、道からは小林林務部長、斎藤生物保護指導監が同行した。なお、調査は網走、釧路、根室支庁、および北見林務署の特別のご配慮によりきわめて円滑に行なわれた。知床国立公園については犬飼副会長、井手理事、石川理事が随時調査されている。

この三回にわたる調査記を三名の方に、個人的な立場で書いていただいたのでご覧ねがいたい。なお、当時の調査資料にもとづき役員会において検討のうえ、本会としての意見をとりまとめ道に提出することになっている。

網走国定公園

景観の特徴

北海道の支笏洞爺、大雪、阿寒、知床の四国立公園はいずれも新しい火山作用によってできた地域で、起伏のある立体的な地形によって強い刺戟を与える景観であるが、湧別より斜里にわたるオホツク海に沿う湖沼地帯、すなわち網走国定公園は最近一万年以内の沖積世の時代に海面下にあった地域が、だんだん隆起陸化したときの海の名残りである海跡湖によって展開された景観で、低い丘陸地に囲まれ、広々としてはるかにオホツク海を視界に入れる茫洋低平な地貌は前者とは全く異質の特徴を持ち、静かなやすらぎを与える性質のものである。

北海道は火山に恵まれ、その景観は火山作用によるものの多いことを特徴としているが、そのために一層それと対照的なこの非火山性の風光は魅力を与えるものと思われる。

西より、コムケ沼、サロマ湖、ノトロ湖、リヤウシ湖、アバシリ湖、オンネ沼、モコト沼、トウフツ沼とオホツク海に沿うてつらなる湖沼は、いずれも海跡湖であることにおいて成因的には同じであるが、各湖沼それぞれに異る成生過程を持って、現在の鹹度なども異ることは十数年前〝毎日出版文化賞〟を得、ベストセラーでもあった、湊正雄著「湖の一生」に流麗な筆致で描かれている。

サロマ、ノトロ、コムケでは鹹度が高く、アバシリ、オンネ、リヤウシは低くそのほか中間のものもあって、湖に棲む魚介にも自ら差異がある。その意味で各湖特有の魚介を食膳に供することは、その湖が海であった頃の性質から進化してきた程度を示すものとしても趣きのあることである。

また、古く棲息していた軟体動物の貝殻が集積した貝殻帯のあることもこれらのオホツク湖沼の特徴で、日本の他の地域には見られないことである。

この貝殻帯の位置や貝の種類によって湖の沖積世以来の変化が分かり、さらに貝塚や先史学上貴重な土器包含層が湖周辺に発見され、先住民族の生活域を示す古地理とその変遷が推定されるようになり、日本では他に見られない面白い湖の歴史が編み出されている。

洞爺、支笏、倶多楽、屈斜路、摩周、阿寒の湖は、はげしい火山爆発と陥没によってできたカルデラ内の火山湖でありオホツク海辺を彩る湖沼群は静かに行なわれた陸地上昇（海面降下）で生成した海跡湖であることは、それらの歴史をそのまま景観にも反映して、それぞれ凄さとなごやかさのいちじるしい対照をなし網走湖沼地帯は火山景観の優越した北海道にかえって異質の光彩を放っている。

網走湖

網走湖の網走川への出口と呼人半島のつけ根との中間湖辺に網走湖荘がある。

十月九日朝までにここに集まって、九、十両日この地帯の視察検討を行なった一行は東条猛緒会長、井手貴夫理事長、斎藤春雄理事、金内和一郎氏、網走支庁佐藤恬林務係長と、小生に地元の方一、二名であった。

網走湖は長径十一キロの長楕円形で、網走市と女満別町にまたがり、女満別町では女満別湖とも呼んでおり、もう一つ別の湖もあるのかと錯覚を起こさせるので、地理的に一本に呼称すべきものと思われる。

女満別町近く湖南端で網走川が流入しその堆積物でできた三角洲が二キロくらい突出し、呼人半島とともに湖岸線を複雑にしている。そのため湖の全貌を一望し得るところは少ないが、湖を一周する道路があり、各地点よりそれぞれ異る景観を鑑賞できる。しかし、これ以上に湖辺近く走る車道の必要はなく、むしろ呼人半島の湖辺をまわる歩道をよくし、湖岸逍遥の快味と静寂感を味わうほうがよい。

天都山から瞰下した呼人半島は海抜三八メートルの平坦な丘で、全面が畑になっているが、湖辺から見れば草木茂る自然境であり、その先端からの眺望にいいところがあるように思われる。また網走湖荘のある湖辺は鉄道の車窓からもよく見える部分であり、網走湖瞥見の印象を良くするためにも人工物と自然との調和をよく考えるべきところであろう。

昭和二十八年、サロマ湖、能取湖を経て網走湖にいたり、網走湖荘のある附近で鯉料理を食べながら、サロマ、能取両湖のように海とは直結せずに四方が丘陵に囲まれ、水質も淡水に近いこの湖の相違を面白く感じたことがある。このときは夏で、秋に訪れたのは今回初めてであるが、このような北の海に臨む静かな湖沼地帯は紅葉とともに美しさと淋しさをくわえ、一層魅力的になるようである。

網走川

監獄で有名だった網走がどうしてこんなに美しいのか。ことに監獄の農場のある網走川河畔は美しい。十日は少し雨に煙っていたが、半ば紅葉した農場の河岸の林は網走湖より流れ出る静かな清流とともに心を浄化し、罪を洗い清めるがごとくである。

私たちの訪れたときは南岸の車道を修理改装中であったが、ここに河畔の逍遥路だけだったらと、ふと考える人も少なくないだろう。

能取岬

九日、一番先に訪れたのは能取岬であるが、途中の二ツ岩は第三紀中新世の集塊岩、砂岩、礫岩の地層を貫く角閃石安山岩の岩脈の露出である。能取岬には海抜約四〇メートルの平坦な台地面が拡がっており、表部は火山灰であるが下部に砂礫層があり、海成段丘上に火山灰の堆積したところである。

この上に燈台があり、周囲は牛馬の放牧地となって、のどかな景観を示すが、燈台下は第三紀層とこれを貫く輝石安山岩の岩脈より構成された断崖によって海に臨み、冬季流氷期の凄絶さが想像される。

岬の丘上より西方オホツク海辺と、西南能取湖の展望は美しいが、この台地と燈台は知床岬突端の海蝕段丘と燈台のような強い印象は与えない。台地上にはこれ以上人工を加えないで、むしろ二六二メートルの背後の山に道を通じて展望するのがいいかとも思われる。

能取湖

能取岬より能取湖東北岸に下る道がこわれていたので、ふたたび網走に引返し網走湖北岸を通り、間もなく南北に長い楕円形で、網走湖よりも大きい能取湖の南岸にいたる。北岸で丘陵が切れて低い砂丘が海と境している景観は、網走湖とやや異なっている。

卯原内川のそそぐ湖辺には真赤なサンゴ草がじゅうたんを敷き、秋なればこその美しさを奏でている。これは厚岸湖で初めて発見されたアッケシソウで、塩湿地を好み、サロマ湖、トウフツ湖、風蓮湖にも産し、トドマツの葉のような形態で、高さ一〇センチ内外、春夏は緑色を呈するが、秋になると赤くなるのでサンゴ草ともいわれるのである。

このサンゴ草の群生する近くの湿地上に、車の轍の跡が多いのはどうしたことか。漁網を運ぶ道がちゃんとあるのに、湿地帯に車を乗り入れ、貴重な植物群落を滅亡せしむることのないように注意すべきである。

西岸にも諸所サンゴ草の群生を見るがいずれも以前より少なくなった由で、ますます保存に努力する必要がある。井手先生は、西北岸湖辺の黄一色の植物景観に魅せられ、しきりにカメラを向けられていた。

サロマ湖

能取湖西岸を離れ、常呂町を経、オホツク海に沿つて約一〇キロでサロマ湖東

端の栄浦（古くカキ島と称する）に達する。サロマ湖は塩分の多い鹹湖であるがここにもと海に通ずる口があり、砂の堆積でふさがれ易いので、毎年のように人工的に切り開いていた。

昭和十一年、湖北縁砂丘帯の中央より西寄りのところを切り開いた後は口もふさがらず、塩分濃度はさらに高くなり、湖に棲む魚介生物の類にも変化があって今日にいたっている。昼食でサロマ湖産の魚介の鍋は美味好評であったが、ボークカツまで出されたのはかえってこの地独特の風味を薄めることになるので、料理はその土地のものだけで調理したほうがよい。

この辺は湖辺に低湿地がつづき、後背は二〇メートルくらいの段丘が平坦面を拡げ、今後いろいろの施設が計画されているところである。サロマ湖周辺は古くよりよく開墾され、鉄道、車道も縦横し原始的景観はすでに損われてはいるが、湖辺は鄙びた素朴さを残している。観光の中心となる諸点をえらんで、そこにのみ調和した施設をつくり、湖全体として整理するのがいいと思われる。

サロマ湖は面積約一五〇平方キロという北海道で一番大きい湖で、オホツク海に沿うてほぼ東北に長く延び、長径約二五キロ、その北縁は砂丘によってつくられた幅二〇〇～七〇〇メートルの砂洲によってオホツク海と境し、砂丘の高さ最高一六メートルにすぎないので、南岸からの眺望は茫洋として海につらなる壮大な景観である。

したがって、サロマベツ河口からキムアネップ崎間の湖岸などのどかなところもあるが、圧巻は南岸の中央部富武士（トンブシ）川口西側の丘上に設けられたピラオロ荘、あるいは時間がないのでその西には行かなかったが、これより円山までの間の湖岸崖上よりの展望であろう。

この日は曇って雨も降りそうであったので、ピラオロ荘のある崖上の樹間よりの眺めは一層広く果てしないものであった。私たちの訪れる少し前にピラオロ荘下の岩崖が少し崩壊し、警戒すべき状態にあったが、ここの湖岸は中生代ジュラ紀の輝緑凝灰岩と頁岩の山地が直接迫っているところで、この古い岩層には破砕部も多く、風化も進んでいるので、雨のあとなどで崩壊を起こしたものと思われる。

富武士東方の幌岩山（三二六メートル）も同じ岩層で、その山麓湖側はこの古い岩石の崩れた崖錐でできている。したがって建築物をつくる場所は、地質的にあらかじめ検討することが望ましい。

さらに西岸丁寧の南一キロ鶴沼湖畔には道指定文化財のアッケシソウ群落があるが、そこまでまわる時間がなく、サンゴ草鑑賞の最高期であったが残念であった。前に昭和二十八年には砂洲を切り開いた水道のすぐ西方にある砂丘上の三里番屋に一泊し、海に侵蝕されるものと、新たに延び拡がる砂浜との自然の営みを面白く見ることができた。

天都山と大観山

十日朝は小雨が降っていたが、この国定公園一帯を広く展望するために、道指定の名勝天都山に登った。晴天の日は知床半島の全容も遠望され、雄阿寒、雌阿寒、藻琴の山々も視界にはいる絶好の展望台であるが、この日は、ただ雨に煙る網走、能取、涛沸湖にオホツク海の景観を鑑賞できたのみである。

天都山は海抜二〇七メートル、砂礫と凝灰岩や火山灰の洪積層（美幌層）でできた台地状の丘であるが、同じような丘の大観山には丘上数本のシラカバが残りなんの施設もないが、ここからの網走、能取両湖の眺望はかえって趣きがある。これからの新しい展望地として、やむを得ない小施設は背後の樹林中におき、丘上は今のままのほうがよさそうである。

網走海岸の柱状節理

網走市街附近の海岸には、第三紀中新世の地層を貫いた普通輝石安山岩の岩脈が多く、港の防波堤の一部になっている帽子岩もその一つで、円頭あるいは帽子のような形を示している。ボンモイ海岸のものは横臥柱状節理から次第に傾斜して、扇を拡げたような形を示す節理の美事な露出で、学術上も景観上も価値あるものである。

火成岩の節理は、その冷却の際岩石の収縮によってできた規則正しい割れ目で柱状節理は冷却面に対して一般に直角を示すため、柱状節理を見てその火成岩の迸入、あるいは流動の方向が推定できるものであるとともに、そのいちじるしいものは景観にも美しさを与え、とくに海岸道路に沿う本節理は何人も容易に鑑賞でき、保護すべき価値あるものである。

近年、この岩石は砕石として採取利用されていた由で、鉄道のトンネルに接近したため現在中止しているが、同種の岩石は能取岬までの海岸沿いや、そのほか諸所に見られるものである。

小清水海岸濤沸湖

十日、網走より小清水に向う途中、新しく設立されたモヨロ記念館を見る。国指定史跡の内容を模型的に示し、出土品を陳列し、教育的で効果がある。

濤沸湖に着く頃は思いがけなく晴天になり、湖の背後にある藻琴山や斜里岳もくっきり見え、とくにその上に拡がる雲の姿は美しく、広大に独特な景観を展開していた。長径約八キロの東西に長い不規則な輪廓を持つ湖と、海をへだてる高さ一〇メートルばかりの長い砂丘帯は、夏ならば、ハマナスやその他の花で飾られた原生花園の美しさを誇るところである。

いまは色彩なく、かえって静かに落ちついた中に、北の海の淋しさ、湿原に放牧された牛馬の姿や、湖辺の水鳥の群のなごやかさをしんみり味あわせてくれるようである。鉄道と湖岸の間の自動車道は整備され、観光客のための施設も必要であるが、色彩も形も自然景観に調和するよう設計することが望ましい。

（石川俊夫）